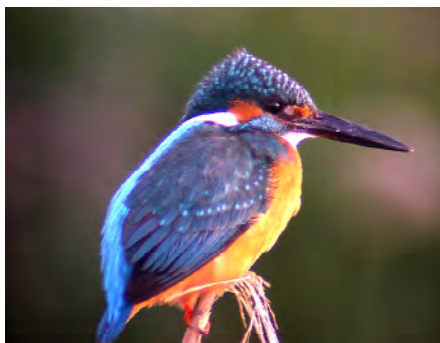


小田原教育

第104号

平成18年3月20日



カワセミ

背中とはコバルトブルーでおなかはオレンジ色、水中に飛び込み、長いくちばしでさかなを捕らえます。ツィーと強く鳴いて一直線に水面すれすれに飛んでいきます。3月上旬から縄張り争いが見られるようになり、4月上旬には雌雄の間で求愛給餌や交尾が観察されます。抱卵以後には求愛給餌は見られなくなり、非繁殖期には単独で縄張りを構えて分散します。春先になると雌が雄の縄張りに入り込んで番(つがい)が形成されます。群れを形成することはありません。

目次

巻頭言

「歴史と夢を語ること」

小田原市教育長 2

1 小さなころみ

①「定期テストでも使ってみました」

評価・評定に関する研究員 3

②「学校生活実態調査の概要」

学校生活実態調査研究員 4

③「二宮金次郎物語作成逸話」

二宮尊徳読み物資料の作成に関する研究員 5

④「相談(対応・メッセージ等)を通して 今思うこと」

教育研究所教育相談員 6

2 特色ある取り組みから

「平成17年度 エネルギー教育実践校としての取り組みから」

橘中学校 7

3 特集

「郷土の偉人 二宮尊徳(金次郎)を学ぼう」

尊徳記念館 8

4 ある教室から

「子どもの中から「問い」が生まれる瞬間」

学校教育課指導主事 10

5 教育相談指導学級から

「一人ひとりにより添って」

マロニエ教室教育相談員 11

6 研究所だより

教育教研究所指導主事 12

「歴史と夢を語ること」

小田原市教育長

教育行政に携わるものとして私は次の三つのことを大事にしています。これは色々な所でも話していますが、一つ目は学校には良い先生が必要なんだ、ということです。これからの将来を背負ってたつ子どもたちにとって、先生が良くなければ素晴らしい子どもたちが育たないということです。二つ目は、なんと言っても現場主義ということです。学校あつての教育委員会、それは生徒あつての教師と言い換えることもできるように、その主役を大事にしなくてはならないということです。三つ目は子どもたちの幸せを大事に考えるということです。教師であれば当然のことであるかもしれませんが。私はこれらの三つを常に念頭に置きながら小田原の教育を考えてきました。

さて、小田原の教育を考える上で、もう一つ考えていただきたいことがあります。それは、先生方の役割と言うことです。学校には若い先生、ベテランの先生、あるいは教諭と教頭、校長のようにそれぞれ役割や立場の異なる先生方がいます。その役割や立場の異なる先生方がそれぞれの経験や良さを発揮して学校運営をして欲しいと考えています。例えば、私が前任校で実感したことです。勤務したものでなければ分からない大変さがどの学校にもありますが、前任校は大変な学校でした。まさに大変な歴史を背負った学校でした。それが1年、2年、3年経つと少しずつ良くなってきました。かつての学校で一緒に生徒指導で苦労してきた先生方が、一生懸命取り組んで少しずつ学校が良くなってきたのです。良くなってきた時に私が考えたことは、「年配者は歴史を、若者は夢を語れ」という言葉です。言い換えれば、その学校に長くいる先生の役割と、新たに入ってきた先生の役割がそれぞれあると言うことです。それは、新しく転任してこられた先生はとにかく、自分がその学校には新参者で「この学校は……」などと他人事のような言い方をしがちです。また、その学校に長くいた先生、またその学校に貢献し努力してきた先生は、「うちの学校は……」という言い方をするように、学校に対する思いに違いがあります。ここで大事なことは何かというと、大変な学校が良くなり、良くなったことを維持し、さらに良くしていく。その時に大切なことは、大変だった時にやってきたことを忘れさせない、つまりその学校の歴史、積み上げてきた成果を語っていくことが大事だということです。何で良くなってきたのか、良くなっていくためには先生方の多くの苦労があったことや、生徒と一緒にやってきたことを語っていかなければならないと言うことです。それがベテランの先生、年配の先生の役割だと思います。その上で若い先生、新たにきた先生は夢を語って欲しいと思っています。学校の歴史を知って、夢を語ることに大きな価値があります。それこそ学校に新たな息吹を吹き込むことになるからです。そういった意味で年配の先生方と、若い先生方はそれぞれが役割を認識して、その元に生きていく、責任を果たしていく、そういうことがとても大切なことだと思っています。今、この年齢になって歴史を語ることの大切さ、そしてその上に今日の小田原の教育があることを感じています。不易と流行という言葉を書くことがあると思いますが、不易の部分語り大事にしながら、流行を取り入れた教育に取り組んでいきたいと考えています。



小さなころみ

①

『定期テストでも使ってみました』

評価・評定に関する研究員

定期テストでも、評価規準を意識しての作問の必要性を感じ、昨年度から、定期テストの採点にA・B・C採点を取り入れてみた。一部の教科ではすでに各観点ごとにA・B・Cで採点しているが、担当が理科である私の場合、小單元ごとに観点別に大問を作り、それぞれにA・B・C採点ができるように作問を行った。1回の定期テストに大問が13問、つまりA・B・Cが全部で13個もつくようなこともあった。採点は、正答数に基準を設定し、いくつ以上正解ならA、いくつ以下ならCといった基準で行った。もちろん、作問に当たっては評価規準をもとに問題を作成した。さらに、昨年度途中から小田原市では、観点別評価の総括にA○～Cといった5段階評価を導入している。したがって、定期テストの小問数も基本は4～5つとして作問した方がじっくりくると考えたので、次のテストではそのようにしてみた。

このようなテストを行うには、問題の妥当性となぜその点数を基準に採点したのかという説明に耐えうる根拠が必要になる。学習指導要領と評価規準を片手に、今までの指導を振り返りつつ作問したのであるが、小問5つをどのようなレベルの問題にしたらいいのか大いに悩んだ。結局、難しい問題から簡単な問題までを入れ込んだので作問となった。また、1問1問の問題が評価規準のどの部分に当てはまるのか考えての作問のつもりが、いつのまにか評価規準にこじつけ気味の問題になっていることに気がつき、あらためてこの方法の難しさに悩んでしまった。

本年度の定期テストでは、今までの設問に加え、技能・表現の観点の問題に、実験結果から必要な情報を読み取り、見やすくまとめ

上げるという問題を盛り込んでみた。採点の基準は正答数(量)ではなく、記述した内容(質)で設定した。わざわざ定期テストにこのような問題を入れなくても、日常の指導の中でレポートやワークシートなどを使って同じような指導・評価ができるのだが、このテストでは今まで行った評価後の指導結果を再び評価するという意味合いを持たせたかったので、定期テストに入れ込んだのである。しかし、採点の基準が妥当かどうかは、まだまだ検討の余地が大ありと感じている。

さて、生徒の反応だが、特に混乱することなく受験し、自然に答案の返却を受けていた。採点結果が得点ではなくA○～Cであるので、生徒は自己の單元ごとの状況が直感的に把握しやすかったようである。また、教師としても、A○～Cの方が生徒の状況を視覚的にイメージしやすいといったメリットがあることに気がついた。

このように手探りで始めた定期テストの試みであったが、おおむねよい手応えがあったように感じる。作問や採点の時間がかなり増えてしまい大変な思いをしたが、曲がりなりにも單元ごとに生徒の学習の実現状況が視覚的につかめるので、今後の指導の改善に役立てやすくなったと感じている。





『学校生活実態調査の概要』

学校生活実態調査研究員

1 研究の経過

この研究は、教師と保護者の考え方の傾向や相違点を知ることがを目的に発足している。これまで、平成14・15年度の2年間、小学校3年生・6年生、中学校2年生の子どもを対象に「児童・生徒の生活と意識に関する実態調査」のアンケートを行った研究を受けて、さらに平成16・17年度は調査対象を保護者と教師に変え、「現在の子どもたちをどう見ているか」、「どう感じているか」を調査することにした。

調査期間は平成17年2月23日から3月1日の間で、小学校2年生・5年生、中学校2年生の保護者と小中学校の全教員を対象にした。調査結果の集計は、パソコンによる単純集計である。回答された調査用紙の中で有効対象数は、保護者2086名、教師629名であった。集計結果が出た後、前回アンケートを行った「児童・生徒の生活と意識に関する実態調査」との比較考察を行った。

2 まとめと考察

(1) 学習について

保護者・教師ともに、「子どもは授業に意欲的に取り組んでいる」という肯定的な見方がされており、「今までの学習内容が理解できている」と捉えている割合も全体的には高い。しかし、家庭学習では「学年が上がるにつれて、その習慣が身につかない」という見方が増えている。

(2) 対人関係について

友達関係については、保護者も教師も良好な状態にあると肯定的に見ている。教師と子どもの関係については学年があがるにつれ、やや否定的な見方が出てきている。

(3) 規範意識について

どの設問にも共通して保護者・教師の回答は、学年が変わっても意識の変化が少ないことが言える。ただし、「あいさつ」に関しては、学年が上がるにしたがって、若干良い傾向を表しているのは特筆すべきことである。

(4) その他の学校生活について

保護者が見ることができる「行事」「部活動」については小学校・中学校ともに保護者と教師の見方にあまり差はなく、肯定的な捉え方をしている。保護者が見ることができない「清掃」「係や当番の仕事」「食事のマナー」については保護者と教師の見方にかなり差があり、教師の方が否定的である。

(5) 家庭生活について

子どもを取り巻く環境として、問題となっている携帯電話については保護者も教師も賛否両論に分かれていることがわかった。

3 最後に

子どもたちを見ている保護者や教師の思いや願いを追究していこうとした今回の研究であったが、データ・考察の両面で十分でない部分がまだまだ残されているように思われる。今後、この結果が子どもたちを理解するための一助となり、教育実践に役立つ資料となることを願っている。



小さなころみ

③

『二宮金次郎物語作成逸話』

二宮尊徳読み物資料の作成に関する研究研究員

昨年、読み物資料を作ることになり、まず研究員で関係した本を読んでいくところから始めました。いくつかのエピソードを見つけ、「尊徳さん、初めの奥さんに逃げられたんだ。」「説得したのに帰ってくれなかったなんてねえ、かわいそう。」また桜町では、反対する者達に好みのものを作って、酒でもてなすように指示をしているところがあります。「懐柔策だね。」「尊徳さんも私たちと同じようなことも考えたんだね。」などと、不見識にも人間くさい部分を見つけて、ホッとすることもありました。しかしそれが、かえって自分たちには到底及ばないことを考え、実行させてきたことの偉大さが浮き彫りになってくる気がしました。自分や周りの人々の生活をよりよくするために生み出された、いくつもの合理的な方法がつくられています。その中には五常講のように、現在の協同組合や、保険などの制度につながっているものも多くあります。「形だけではなく、基になっている『仁・義・礼・智・信』の五つの教えを引き継いでいるかしら。」「分度にしても、自分の収入を考えて生活すれば、ローン地獄なんて起きないはずなのに。」給食費の集金袋の中央には、金次郎さんのイラストがありますが、「あれは、給食費などの支払いに対して、分度を守って生活することを論しているのかな。」（ちなみに柴にさした鎌が昨今の事情により削除してあるとのこと）時々脱線しながらも納得したり、感服したりしながら

ら進めてきました。

「今なぜ二宮尊徳なのか。」といわれることもあります。複雑化された現代においても、当時の人々と生活の基本・精神のものは同じであることがわかります。尊徳さんの考え方・生き方が今の時代にも当てはまり、必要とされているのではないかと思います。小田原は尊徳さんやその後継者を輩出した土地であり、同時に尊徳仕法を一時的に禁止した土地でもあります。「この研究会は、もしかしたら私たち教員に二宮尊徳を学習させることが目的だったのかもしれない。」とも感じました。

今年は、「二宮金次郎物語」が教育の現場でどのような使い方ができるかを考えて案を作りました。

- ・ 社会科… 4年「郷土の発展につくした人々」
6年「江戸時代の暮らし」
- ・ 国語科… 読書から、ブックトーク
- ・ 総合…… 尊徳学習など
- ・ 道徳…… 「推譲」「勤労」「積小為大」

特に尊徳思想については、児童の発達段階を考慮しながら、理解できる部分を取りあげていくといいのではないかと思います。その他にも、活用の仕方はあると思います。しかし、何より先生方が実際に使われたときの様子を話していただき、情報交換をしてもらえることが1番の活用方法の紹介になると思いますので、ご活用をお願い致します。

（＊親しみをこめて「尊徳さん」と呼びました）



小さなころみ

④

『相談(対応・メッセージ等)を通して 今思うこと』

教育研究所教育相談員

「最近、特にわがままになってしまっ」と訴える 母
「大変だったね。ずいぶん悩んだんだね」と返す 相談員

この何気ない言葉かけに、子どもも保護者も救われたとか。

本人の訴え 「学校に行きたいのに行けない」「自分の気持ちをわかってもらえない」

「生きている意味ってなんだろう」「自分は駄目な人間なんだ」「学校が怖い」等

保護者の訴え 「親としての育て方が悪かったのか」「何度も嘘をつかれてつらい」「進学は・・・？」

「いつごろ学校に戻れるようになるのか」「どう声をかけたらいいのか」等

教師の訴え 「家庭訪問しても会ってもらえない」「今までずっとよい子だったのに突然のことで

困惑している」「どうやって接していけばいいのか」「原因がよくわからない」等

相談の現状は、本人も、保護者も、教師もみんな苦しんで悩んでいます。でも、みんなひとりひとり違うのです。いろいろなタイプの児童・生徒に同じ方法では通用しません。まさに、ケースバイケースなのです。でも言えることは、自分らしさが受け入れられずに、枠の中に押し込められてしまうストレスを、感じてしまっている状態であるということです。また、学校に行きたくても行かれない状況であるということです。学校に行ける場をみんなで考えていけるといいなあと思っています。形ではなく本人の気持ちを大切に考えながら・・・。

相談時、気になった会話と、考えたい会話

① 本人・・・「誰かにもものをかくされたり、嫌がらせをされます」と訴えると

教師1 「あなたがおとなしいから」

教師2 「あなたにも悪い所があるんじゃないの？」

教師3 「あなたが積極的に行動しないからされてしまうんじゃないの？」

教師4 「慣れるしかない。性格を変えるしかない」

教師5 「あなたが暗いからだ」

本人・・・ 「自分が悪いからなんだと、ものすごく落ち込んでしまった」

② 相談員・・・ 「学校に相談されたいかがでしょう」

保護者 「先生方はみんな忙しそうで・・・相談なんて・・・」

相談員・・・ 「では、おもに渉外を担当されている教頭先生に相談されたらどうでしょう」

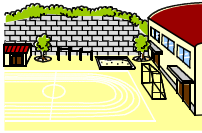
保護者 「えっ、教頭先生に相談してもいいんでしょうか・・・」

さまざまな相談を受ける中で、何気なく発せられている言葉が、子どもの行動に大きな影響力を与えていることが多いようです。

子どもに 自信とさまざまな力を与える温かい言葉かけを、心を気遣う言葉かけを、今よりさらに、心がけて行きたいと考えています。

特色ある学校

橘中学校



平成17年エネルギー教育実践校としての取り組み

橘中学校

橘中学校は「エネルギー教育実践校（財団法人社会経済生産性本部エネルギー環境教育情報センター主催）」として3年間取り組んできました。本年度も校内研究として位置付け、「環境とエネルギー～今、中学校で取り組む環境・エネルギーの問題と対策について～」をテーマに、京都議定書の発効によってCO₂の排出量削減が今日の社会全体の大きな課題となっていることを受け、今後学校教育にも求められるエネルギーや環境問題をどのように扱うのか、教科や総合的な学習の時間、生徒会活動など様々な試みに取り組みました。

1 本年度の取り組みから

その実践内容の一部を写真で紹介します。



全校道徳で、市の環境政策課の方から『環境とゴミの分別』についての講話を伺った。これを受けて、1年生は総合的な学習の時間に学校や家庭から出るゴミについて調べた。



緑の羽根募金を行うにあたり生徒会は、その主旨や必要性について呼びかけるため、パワーポイントを使って、全校にプレゼンテーションを行った。保護者の方にも聞いて頂いた。



3年生の総合では、様々な電池についての探究的な学習を行った。このグループは、燃料電池の実用化の様子を調べるため、横浜のJHFCパーク（水素ステーション）を訪ねた。



2年生の総合では、発電についての学習を行った。理解を深めるため、各クラス別々の発電所を見学に行った。このクラスは浜岡原子力発電所と風力発電設備を見学した。

2 3年間の振り返りと次年度に向けて

エネルギー問題や環境問題についての学習は充分行われ、知識として理解はされているが、実際に省エネや環境保全のための活動を実践していくところまではもう少しである。今後は、取り組みを更に発展させ、地域と連携した活動が展開できるように、保護者や地域の方々や企業との協働も考えていきたい。

郷土の偉人 二宮尊徳（金次郎）を学ぼう

尊徳記念館

平成10年度から「二宮尊徳学習事業」が実施され、市内の多くの小学生が尊徳の事績を学び、その学習成果を市役所ロビーやかもめ図書館、尊徳記念館等で発表しています。「尊徳はすごい！人々のためにつくした偉い人だ！」「積小為大がよく分かった。」「報徳の教えをもっと勉強しよう。」……

尊徳の人柄や尊徳の教えを児童がそのまま素直に感じ、文章や絵、写真等々、様々な形で発表しています。児童の目で見たと尊徳は、本当に輝かしいものと思います。そして、その感動をいつまでも持ち続けて欲しいと願っております。また、児童が中学生になって、ますます二宮尊徳に関心を持ち、尊徳学習を深めてもらえるよう、「郷土の偉人二宮尊徳を学ぼう」と題したパンフレット（A4版カラー、8ページ）を作成しました。既に学校を通じ市内全中学生及び小中学校教職員等に配布されたことと思います。配布にあたりご協力いただきました方々にお礼申し上げます。

その内容については、（財）報徳博物館に編集協力・監修をお願いし、また、中学生にも分かりやすい文章で、尊徳の入門編としてまとめました。ぜひご活用ください。

「郷土の偉人 二宮尊徳を学ぼう」内容紹介

■ 二宮尊徳（金次郎）の生涯

尊徳（金次郎）の生涯を、

- 1 苦しい生活に耐える、
- 2 青年時代の金次郎、
- 3 桜町のむらづくりと各地の仕法、
- 4 小田原領民の飢餓を救済、
- 5 幕府役人となった金次郎

の5項目に分けて紹介しました。



【酒匂川河原の表彰の碑：金次郎は小田原藩主大久保忠真から表彰を受け、働く目標を自分から社会に置き換えていきました。】

■ 金次郎と金治郎、尊徳は諱（いみな）

金次郎の名前について説明しています。

■ 二宮金次郎の小田原での出来事

金次郎は36歳まで、小田原ですごしていますが、その時学んだ事や経験したことが、後に多くの藩や村々を救った考え方の基になっています。数々ある小田原でのエピソードのいくつかを紹介しています。



【報徳掘跡：湿田が、金次郎の指導により二毛作の良田になりました。】

- 1 金次郎と観音経
- 2 信用組合のはじまり「五常講」制度をつくる
- 3 お茶壺橋の延焼防止
- 4 大久保忠真による表彰
- 5 年貢用枘の改良
- 6 天保の大飢饉で小田原住民を救う
- 7 曾比の報徳堀

■ 二宮尊徳（金次郎）その教え

現代に通ずる報徳と呼ばれる思想

金次郎は、幼少から大変読書を好みましたが、貧しい家に育ったので、正規の教育を受けたわけではなく、天地自然に直面し、あるいは日常生活の中から真理を学びました。どんな書物に書かれていることでも、実際に照らして「なるほど」と納得しなければ真理とは認めませんでした。こうして習得したものが、たいへん独創的な思想として形成されていったのです。「現代に通じる尊徳の教え」その主なものを紹介しています。

[報徳]・[天道と人道]・[道徳経済一元論]・[一円観・一円融合]・[勤労・分度・推奨]・[積小為大]・【心田開発】と【新田開発】

■ 人の生きる道を歌った「道歌」

二宮尊徳は、人の徳や生活について多くの教訓的な歌を残しています。それらは道の歌といわれ、略して「道歌（どうか）」と称されました。何百首もある歌の中から数首を紹介しています。

■ 外国人から見た二宮尊徳の評価

明治時代に日本人の素晴らしさを世界に向かって紹介した内村鑑三の「代表的日本人」（英文）の一人が二宮尊徳であった事や、第二次世界大戦の敗戦後、G・H・Q（日本進駐軍の総司令部）の新聞課長インボーデン少佐により尊徳が高く評価され論文で紹介された事等を説明しています。



【第二次世界大戦後、経済の建て直しの担い手として発行され一円札（尊徳肖像）】



【平成 17 年 11 月に関東の富士見百景に選ばれた、尊徳の眺めた富士】

■ その他

尊徳こぼれ話や全国の小学校に広まった金次郎像のいきさつ、報徳二宮神社の金次郎像、尊徳生家、回村の像の説明、最後に小田原で二宮尊徳を学ぶための代表的な施設の紹介をしています。

曇らねば 誰(た)が見ても良し富士の山

生まれ姿で 歳世経(ふ)るとも (尊徳道歌)



ある教室から

「子どもの中から「問い」が生まれる瞬間」

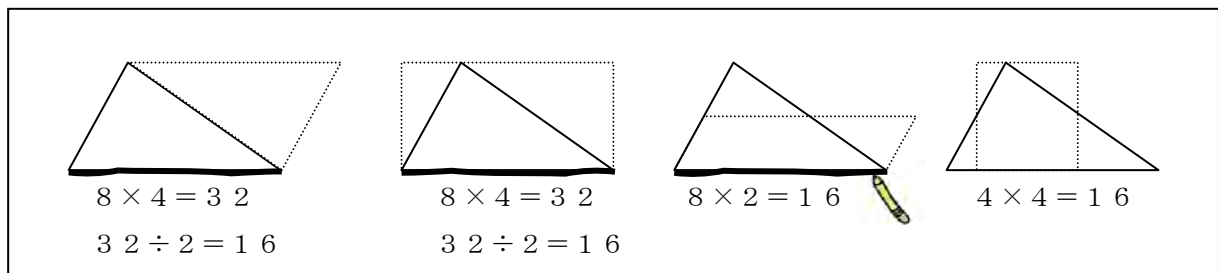
学校教育課指導主事

小学校5年生、三角形の面積の授業。この日は、一人ひとりに配布された三角形の面積の求め方を個々で考えた後、一般化して公式をつくり出していくという展開。

様々な求め方の中から、倍積変形2つと等積変形2つの考え方を取り上げ、練り上げの段階へ。4人の児童から発表されたそれぞれの考え方に対して、質問や補足の発言が続出。まさに大切な視点が次々と子どもたちの口から出てくる。「それは……したからだと思います。」「ホントに……なのか〜?」「……しちゃえば!?!」「なるほど、そういうことか〜。」明るい雰囲気の中で学び合いが進む。

さて、いよいよ、それぞれの式から共通点をもとに一般化していくという過程。

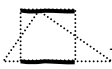
先生の「式を見て、似ている部分は?」の問いに対して、元気そうな男の子が「全部8がある。」と気づいた。「8って、図のどの部分?」の問いかけに、黒板の前に立った彼は、黒板に貼られた図に定規を当てながら“8 cm”に当たる部分に得意げに線を引いていく。



4つめの図に移ったところで「あれ!?!」「8がない!!」—— 子ども自身が、教室全体で共有できる「問い」を生み出した瞬間だった。

“8 cm”はどこにあるのかという謎を解決するステップに入った。

別の子は、「ここだよ、ここ!!」「う〜ん……そうかな?」

一人の女の子が、「ここでいいですか?」「見事正解。「ほ〜っ…なるほど…」」

「すると、この4は、8をどうした4なのかな?」「8を2つに分けた4。」

授業は、このあと、3番目の図の中にも“÷2”を探す学習へと進んでいく。

三角形の求積公式でポイントとなる“÷2”の存在と考え方。その最大の山場が、子どももの「あれ?」という「問い」を発端に、教室全体で深められていった。

課題解決の学習における“課題”。それが指導者からの「発問」ではなく、子ども自身から発生した「問い」として教室の中に共有され、自分たちの課題として取り組んでいかれるような仕掛けが、算数・数学の楽しさや、まさに課題を解決していこうという力につながるのではないかと思う。

授業の流れの中で、子どもたち自身が、算数・数学の本質に迫るような「謎」を発見した瞬間。そういう瞬間に巡り合うと、ワクワクしてくる。

教育相談指導学級から

「一人ひとりにより添って」

マロニエ教室教育相談員

「おはようございます」と元気に挨拶して入室できる子、恥ずかしそうに黙礼だけで入室する子、プレイルームの前で固まってしまう子等、様々な状況の児童、生徒が、ここマロニエ教室に通ってきます。

<こんな教育活動をしています>

本学級は、様々な事情で学校に登校できない児童、生徒が元気に安心して登校できるよう支援していくための学級であり、現在、「しろやま」、「マロニエ」の二教室が運営されています。学校復帰をめざして、集団への適応力を培うために、次の4点の活動を展開しています。第一は、「体験活動」、第二に、「スポーツ・レクリエーション活動」、第三に、「創作活動」であり、これらの体験活動を通して、人と人、人と自然との関わり方を学び、共感する心や仲間意識を育てています。第四に、「教科学習」があり、自分のペースで自習中心に学習に取り組んでいます。



<見学から通級まで> 一教育相談員として関わって一

本学級に通級するためには、教育研究所で

の教育相談、教育相談指導学級の見学、さらに体験通級を経て、正式通級（手続きが必要）へと移行していきます。私と児童、生徒、保護者との出会いは、学級の見学が最初になります。その後、期待と不安が入り混じった状況の中で体験通級がスタートします。その第一日目に来級できるか否かが大きな分かれ道になります。第一日目は在室10分程度、翌日は30分、翌々日は1時間というように、徐々に在室時間をふやし、スモールステップで集団生活に適応させていきます。見学時不安そうだった子が、通級を重ねるうちにリラックスして、笑顔がみられるようになってきます。その子なりの安心できる場所を確保した「証」なのでしょう。この適応状況をふまえ、次の段階である正式通級にステップアップしていきます。子ども達が集団や学級に適応していく状況は、個人差が著しく、その子なりのリズムやテンポがあると言えるでしょう。児童、生徒一人ひとりにより添い、その子に合ったきめ細かな目で関わり、支援していくことが求められています。結果を焦るあまり、短時間で在室時間を長くしたり、課題を多くしたりしたことにより、翌日から通級できなくなった例もありました。子どもにより添うことの難しさを実感することの多い昨今です。

子どもが元気になると、まず保護者が明るく元気になります。この仕事に関わらせていただいての一番の喜びや楽しみが、今の私にとって大きな財産となりつつあります。



研 究 所 だ よ り



◆ 研究所より ◆

教育研究所には 7000 冊以上の教育図書があります。先生方にはいつでも貸し出せることはご存じのことですが、その他にも色々な問い合わせがありご要望にお応えできるようにしています。ここで 17 年度の事例を紹介し、今後も先生方に研究所を活用していただけるようにしていきたいと思っています。

一つ目は「新・小田原市民歌」CD の交換です。昨年度研究所に「楽譜がありますか」という問い合わせがありました。それをきっかけに楽譜を探し、音を付けて CD に焼き付け、希望制で CD の交換をしています。小学校の体育大会前に活用されることが多かったようです。

二つ目は、広報支援事業です。各学校のユニークな取り組みや活動の成果などを市の広報（こゆるぎ通信）を使って、マスコミに知らせるものです。研究所の広報支援事業の書式を元に研究所へ知らせて頂ければ、その情報を元に研究所でこゆるぎ通信を作成し、学校の確認をしたうえで、広報に発信するものです。17 年度はこの「こゆるぎ通信」からいくつかの取り組みが新聞等のメディアに取り上げられました。三つ目は小田原メダカの配布です、本年度は環境保護課で育てている小田原メダカの繁殖状況があまり良くなかったため、十分な PR が出来ませんでした。今後学校や幼稚園で子どもたちの教材として必要な際は研究所までご連絡下さい。

これからも研究所を活用することで、先生方の教育活動がより活性化されるよう紹介をさせていただきました。

【研究所刊行物】

共同研究の成果をまもなく各学校へ送付いたします。内容、対象は「特別支援教育に関する」冊子が全教職員へ、「『二宮金次郎物語』指導編」の冊子は小学校の全教職員へ、小中学校の全教科、全領域の評価規準表は校種にあわせて各学校へ 2 部ずつを予定しています。これからの教

教育研究所指導主事
育活動にお役立ていただきたいと思います。

◆ 18 年度の研修講座日程

◎ 教育講演会

日時 8 月 24 日（木） 13:30 ～ 16:30

対象 小田原市、足柄下郡全教職員

○ 教育講座

① 教育講座 （教育相談研修、希望制）

日時 8 月 21 日（月） 13:30 ～ 16:30

講師 大学教授「講義と演習」

日時 8 月 22 日（火） 13:30 ～ 16:30

講師 大学教授「講義と演習」

日時 8 月 23 日（水） 13:30 ～ 16:30

講師 高橋良臣先生（登校拒否文化医学研究所所長）

「不登校からの出発」（仮題）

② 自然観察

期日	主な観察物
4/15（土）	花、虫、メダカ
5/13（土）	ツバメの観察・調査
5/27（土） or 6/10（土）	磯の生物
7/1（土）	河原の岩石・水生生物
7/15（土）	夏の虫
10/7（土）	山の花や植物、鳥
11/11（土）	小田原の地形、地質
1/20（土）	酒匂川の野鳥、カモ

時間 それぞれ 8:30-11:30

対象 教職員、4 年生以上の児童・生徒
及び保護者

小田原教育 第 104 号

発行日 平成 18 年 3 月 20 日（月）

発行所 小田原市教育研究所

発行者 所長 下澤 禮二

〒 250-8555 小田原市荻窪 300

電話 33-1727

研究所ホームページアドレス

http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/kyouiku_ken/index.html